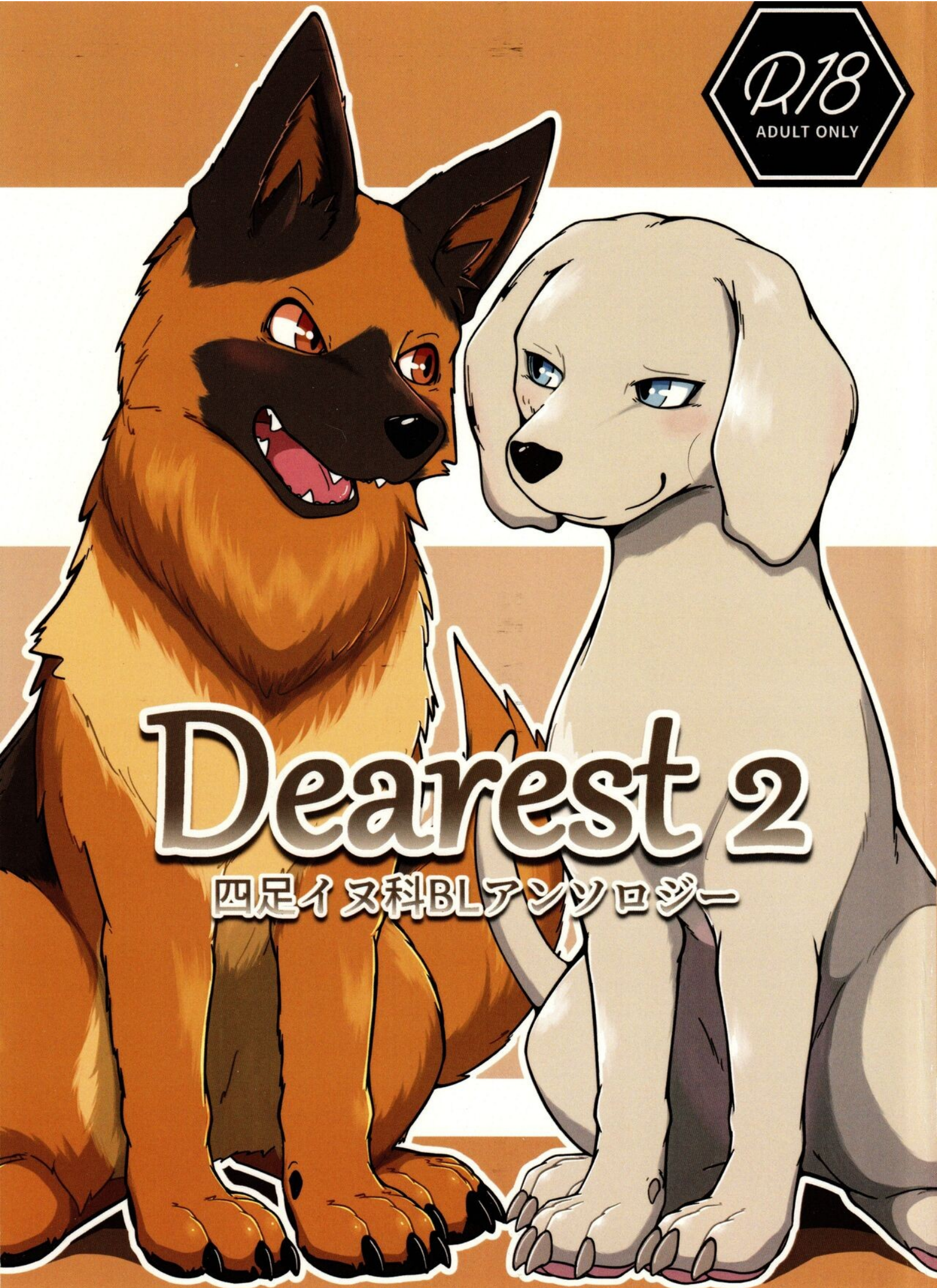




Dearest 2

四足イヌ科BLアンソロジー



P 05 一ツ田はうる

漫画「It's Alright」

P 12 Momou

イラスト

P 13 マノレオ

漫画

P 15 潮路

イラスト

P 16 烙雷

小説「呪われた狼」

P 27 B_Curd

イラスト

P 30 零夜アルフ

イラスト

P 31 水賀つくね

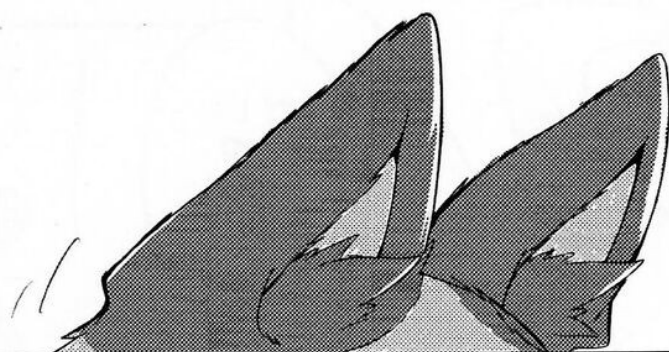
漫画

P 35 大和黑子

漫画「オトナの大丈夫」

P 42 後書き

P 46 奥付



ラルフー

カイ
ジャーマン・シェパード ♂ 3歳

ねえラルフ……

カイどうしたの？

ラルフ
ワイマラナー ♂ 3歳

あの、さ

もじ、

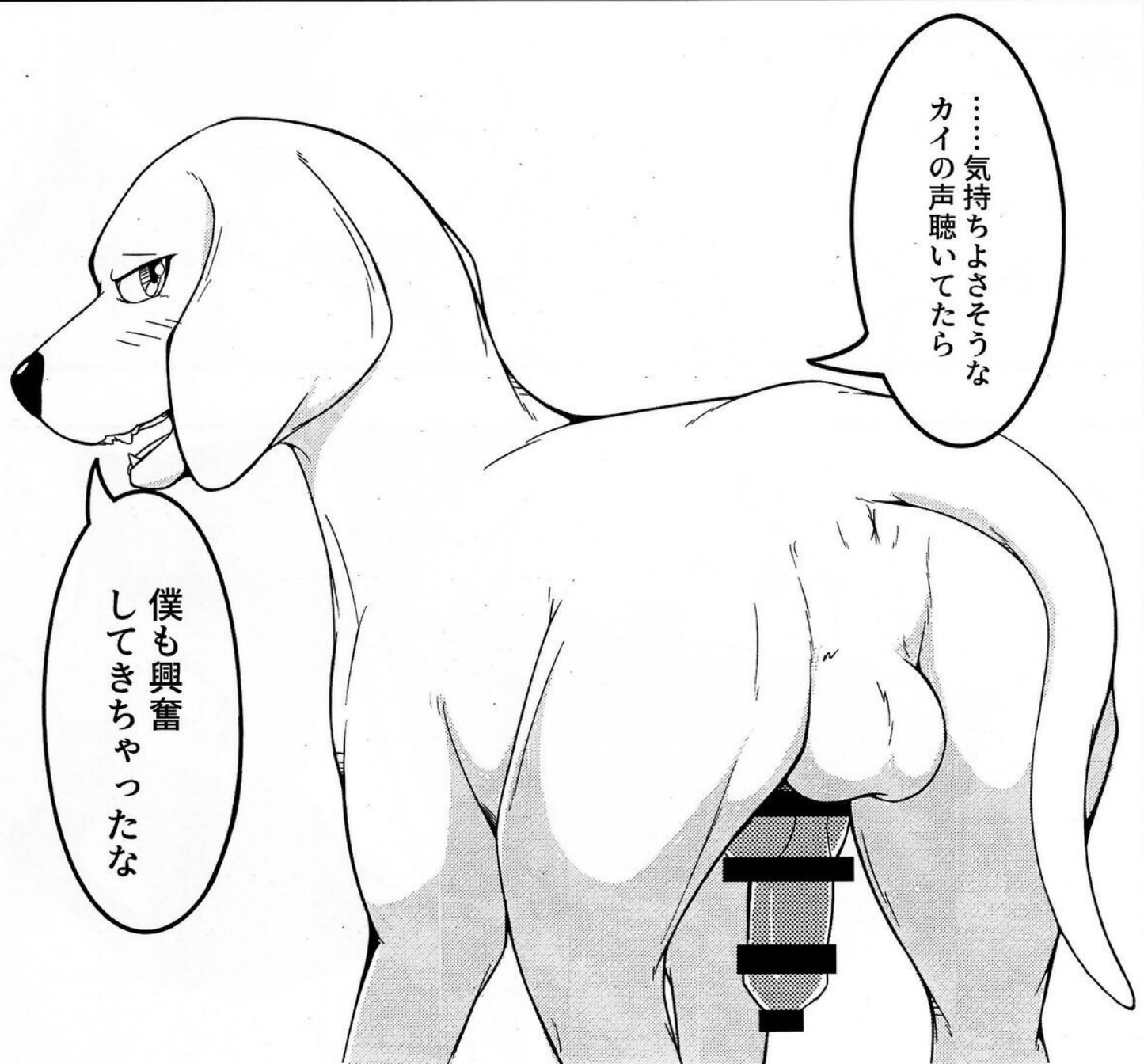
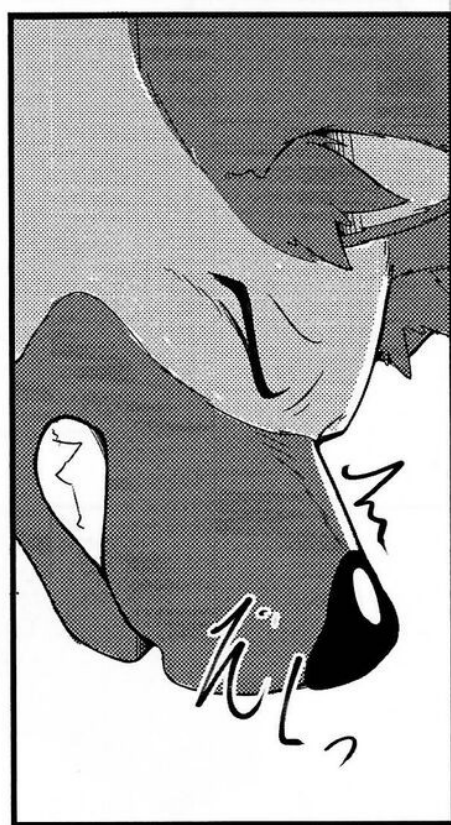
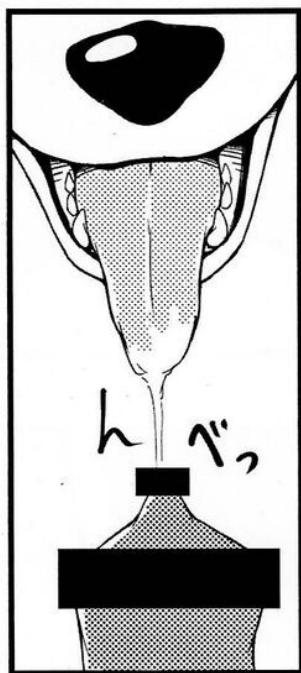
ごめんね

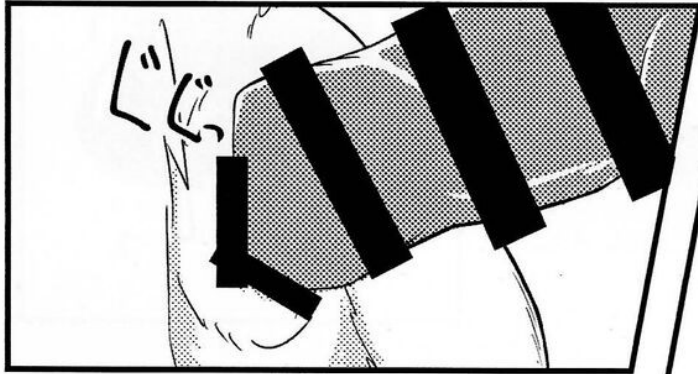
今日も……
してもらいたいな

It's Alright!

作:一ツ田 はうる









ラルフのナカ……

あったかくて
フカフカで
気持ちい……

腰……
止まらない



凄い……

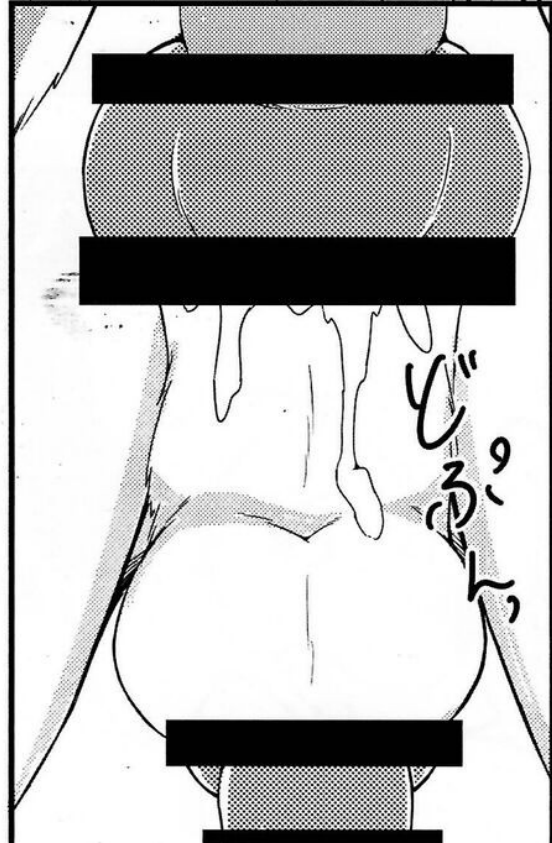
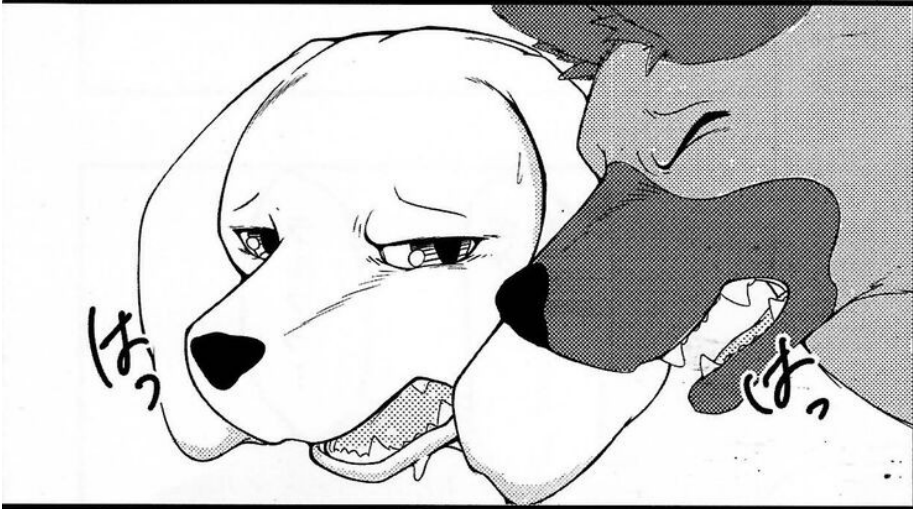


ラルフっ！

ボク
もう出そうっ！

ナカに
出していい……っ？

ッ……大丈夫！



NEXT:
GUEST'S PAGES







END



呪われた狼

烙雷

うつそうとした、薄暗い山奥。木々はどこか歪な形をしており、じつとりとした空気がその一帯を覆い尽くしている。そんな森の中、ドス、ドスと重たい足音を立てる一匹の生き物がいた。

「小僧。死にたくなかったら、此処から立ち去れ」

低い、獰猛な唸り声をあげて、威嚇するその足音の主。それは、非常に恐ろしい風貌をした白い狼であった。この山の生き物ではコレほど大きな生き物は存在しないであろうほどの体躯を持ち、所々に残っている傷跡が、その威圧感を増幅させる。

そんな大狼が見下ろし、威嚇するものとは……小さな、ただの茶色い柴犬だった。犬としては普通の大きさなうえ、特筆してとは言えこの狼と比較すると柴犬はとても小さい。されど、柴犬は狼をじつと見つめたまま動かなかった。まさか聞こえないはずはなからう、と苛立ちながら耳をヒクヒクと動かしながらも、気を取り直して口を開く。

「……小僧。私の噂を知らぬか？我は貴様のような小さな動物を骨まで食べる、恐ろしい」

「知ってるよ」

「……オレの話さえぎらないでもらえる？てか知ってたらなんでも逃げないの？」

ピタリと唸り声をやめ、狼は怪訝そうな表情を見せる。遠慮なく狼の言葉を遮るこの柴犬は堂々としているように見えて何を言っても無駄そうな雰囲気だった。いつも、このように威嚇したらこの森から皆逃げていくというのに、この柴犬は全く意に介していないようで、表情をピクリとも変えようとせずそのまま居座ろうとしていた。

「だってキミ、絶対いい犬じゃん」

「犬じゃねえ！とにかくあぶねえから出てけ！」

「ぶー」

「ぶーじゃねえ！出てくつたら出てく！」

困惑の末に狼は完全に取り繕うことをやめ、背中の中から柔らかな部分を噛んで掴み、強硬手段でこの柴犬を追い出すことにした。種族柄、狼のナワバリ意識が強いこともあるが、この場に外の者を入れてはいけない理由が狼にはあり。

「……くそ、来やがった」

機嫌悪く呟いたかと思うと、柴犬を木の幹で隠し、唸り声を上げる。ザッ、ザッと足音を立てて近寄ってくる足音は、まるで聴かせるかのよう。茂みから現れたその者の姿は、おそらく生き物であろう、と言うことしか分からない。狼と同じような背格好に見えるが、その身に紫色の煙のような何かを纏っている。その謎の生き物に対して、狼は唸り声を上げた。

「隠れている。オレが、祓ってやる」

「やっぱりいい犬じゃん、別にぼくのこと守らなくてもいいのに」

「うるせえ!!とにかく隠れてろ!!」

そう叫んだ瞬間、ガバアと口を開けてその生き物が飛びかかってきた。しかし狼は、即座にその生き物の首にカウンスターのようにつく、ダァン、と音を鳴らして首根っこから地面に叩きつける。そのまま前脚で押さえ込み、胸元に噛み付いたかと思うと、ブチツと体から黒い球体を引き摺り出す。その黒い球体を狼がぐくりと飲み込むと、煙は霧散し、その生き物の身体からもその煙が消え失せてパタリと動きを止めた。

「コイツらは?」

『呪狼^{じやろう}』。オレはそう呼ぶことにしている」

ふう、と一息ついてから、木の根から顔を出した柴犬の疑問に答える狼。その目は、どこか物憂げな色を含んでいる。その様子を、柴犬は面白くなさそうにしていた。

「この森は、生物が住む場所ではない。アイツらに、オレの仲間も、家族も……」

柴犬にかける言葉の隙間に一瞬見えたのは、苦虫を噛み潰したような苦しい顔。切実な声で、狼は続けて柴犬に忠告する。

「だから、帰るな。お前にはまだ親もいるんだろ、ここに来るべきじゃねえ」

「……じじくさい」

「じ、じじくさいっ?! いや、まあ長生きではあるが、じ、じじいつて……」

その狼の心配は無常にも柴犬に一言で一蹴され、怒りというよりショックを受けていた。今までは多少は衝突していたが、どうも自覚が無いこと故にクリーンヒットだったようで、わかりやすく落ち込んでいた。だが、その時だった。ザザツと茂みから音が鳴ったかと思った瞬間、新たな呪狼が柴犬に飛びかかる。

「くっ……!! 危ねえっ!!」

物音で辛うじて接近に気がついた狼は急いで駆け寄るが、不意打ちをされてしまったのは、それは届かない。やはり、オレはまた守れないのか。そう、狼の頭によぎるが、目の前の光景はその考えをいとも容易く上書きする。なぜなら、そこからの柴犬の大立ち回りは信じられぬものだったからだ。

呪狼の噛みつきを躲し、その頭を踏み台にしたかと思うと、そのまま呪狼の尻尾に噛みつき、グルンと前転する。その勢いで、ビタン、とその呪狼を地面に叩きつけたのだ。相手の身体を利用する技、体格差をものともしない力、目にも留まらぬ速さの三つが揃った動きを、小さな小さな柴犬がするもんだから、狼は唖然とする他なかった。

「ね、言ったでしょ。ぼくのこと、守る必要ないって」

不敵な表情で狼を見る柴犬。その目には怯えなどなく、ただ一つの強い意志がその瞳に秘められていた。

「ねえ、離してよ」

先程から、そう時間が経たぬころ。あまり表情が変わらない柴犬だが、露骨に不機嫌そうな雰囲気を感じていた。狼は少し目を伏せながらも、首根っこを掴んでまたもぶらーんと身動きの取れない状態にしていた。

「ダメだ。またアイツらが来るかもしれないねえだろ」

「別に来たってボクが戦えること分かったでしょ」

「分かったからってハイハイじゃあ危険な場所に行ってきたきさいよなんて言うわけないだろ」

「……やっぱり優しい犬なんだね」

「犬じゃねえっつーの!!」

呆れたり、怒ったりしつつも、決して柴犬を離さない狼。不満ながらも柴犬はしばらく運ばれていると、キラリと光が目の前で輝いた気がした。それに鼻をひくつかせると、周りの空気がどこか一変したように感じる。

「よし、ここならいいな」

そう言って、ゆっくりと柴犬を下ろす狼。その辺りは、何かに住み着いているような雰囲気を感じられた。植生は変わらず、霧も常に感っているが、不思議と不気味さは消え失せ、神秘的な雰囲気まで漂っていた。

「ここは？」

「オレの聖域だ」

そう、はにかみながら狼は言う。この空間だけは呪狼を寄せ付けることのない、神聖な空間なのだ。緑の光が木々を伝っており、何かしらの力がこの一帯に張り巡らされていることが分かる。柴犬はグルリと見渡し、しばらく考えた後に、ハツとした様子で呟く。

「……厨二病？」

「ちげえわ!」

すぐさま否定する狼。全く、いちいち皮肉のように言うてきて。ムカつく奴だな、と思いつつも、怯えることなくじっと自分を見据える柴犬を、どうにも邪険にはできない狼なのであった。

「……じゃあ、ちょっと見てろよ」

ため息を小さくつきながら、狼は身体から先ほど飲み込んだような黒い球体を出し、目をつぶって身体の周りに纏わせる。一周、二周、三周とする度に、翠色を仄かに帯びてキラキラ輝いていく。やがてその光球は速度が速まり、ヒュウと宙に放り出されて滞空する。

「はあっ!」

狼の掛け声に合わせて、光球は弾け飛び、光の粒子がキラキラと放たれる。その粒子は空気中の輝きと混ざり合い、そして外へ外へと流れ出していった。

「こうやって、聖域をちよつとずつ増やしてるんだよ。この領

域だとアイツらも寄ってこないしな」

「へえー、想像より凄いな」

「……一言余計なんだよ」

ピキピキと頭に血を昇らせながらも、珍しく柴犬が目を輝かせているような様子で見つめているから、仕方ないから黙ることにする。しかしそれをいいことに、柴犬はまた生意気な小言を続ける。

「だって、そういうのってマーキングですかと」

「バカ。ってかなんでそうなるんだよ」

「狼さんの『聖水』じゃん、効能あるよ多分」

「そうか、なるほど。じゃねえよ、普通にきたねえわ」

またも、狼は深いため息。今日は何回ため息が出ただろうか、と考えるともう一回分ため息の回数を増やしてしまいそうだ。こんな話題でも表情を変えずにしろっと言うから、ふざけて言っているのか本気で言っているのか分からず、狼は悩まされる。堪らず、話題を変えようと狼はぶっきらぼうに問いかける。

「それで。なんでここに來たんだよ」

「え？優しい犬であるキミに会いたいからだよ」

「真面目に言えよ」

「本気なだけで」

「茶化すのはいいって。ほら、ホントのこと言ってみろ」

さっきまでと同じからかいだと決めつけて、呆れながらオオカミがそう言ったとき。いやに柴犬が一層静かになったな、と

不思議に思っただけ顔を上げた瞬間……柴犬は、狼の視界には映らなかった。

「……んむっ!?」

代わりに、狼の口元にグイッと背伸びしながら、唇を軽く重ね合わせる柴犬。その行動に、その感触に驚き、狼は飛び上がり、前脚で口元を押さええながら、目を見開いていた。

「お、お、お前……!?」

「本気だっけ言ったじゃん。ボク、嘘はつかないよ」

じっと見つめる目は、最初から全く変わらない。だが、狼にはガラッと変わったように見える。それは、彼の好意に気づいたから。そして、その好意が、同性に、異種族に持つはずのないものであることも、含めて。

「お前、狼にそんなことして、分かっているんだよね……!」

狼は、狼狽する。まさか、自分がそういう対象になると思っていたいなかったから、そして何より、常に半目で何を考えているのかわからなかったコイツが、まさか自分への好意を持っているなんて、思うわけがなかった。自分をずっと見ているのは、まさか……？ だが、そこまで考えると、やけに合点がいく行為が多い。わざわざここまで会いにくること、無理矢理にでも狼の隣に居着こうとすること。それが、その言葉に信憑性をもたす。

「分かっているよ。そもそも犬でも同じだし。それとも、それも言葉にしないと分からない？」

柴犬がそう言うてくる表情は、やはり変わらない。いつもと同じ半目で、考えが全く見えていなかった。しかし、そのはずなのに、彼がどんな感情を抱いていたのか、分かったような気がした。最初から今まで、変わらぬ表情でジッと見つめていたのは、その真意が、今顯になったのだ。柴犬は、少し真剣みを帯びた声で、狼に告げる。

「ぼくは、あなたと交尾がしたい。そして、ぼくをあなたの番にしてください」

柴犬は狼への好意をハッキリと口にする。そう言われてはもう、狼は自身に好意を持たれていると、認めざるをえなかった。それを認めた狼は、柴犬を前脚で自分のもとに寄せた。

「……後悔、するなよ」

狼は、柴犬にそう囁く。僅かに柴犬の口角が上がるや否や、狼はその小さな柴犬の体を跨ぐ。一気に狼の息遣いが荒くなり、グルル、と差し詰め捕食者のように喉を鳴らす。それも当然、狼はこの据え膳を食らうのだから。それを気が早いと咎めるものは、勿論誰もいなかった。

狼の股の上で、徐々に膨らむ一本の槍。求愛を認めた瞬間、彼らの身体はフェロモンを急速に分泌し、身体を交尾させるように導く。道理とか精神とか考え方などではなく、単純にそのようになっている。オスとオスだから関係なく、そのトリガーがかかった後は、身体がすぐさま発情してしまうのだ。今やらねば、すぐにやらねば。その思いが、理性を極めて弱くする。

こす、こすと柴犬のお尻に擦られ、大きくなった狼の一物。根元にコブを携え、赤々とした色をしているそれは、切り取ってみれば少しグロテスクに見えるが、悩ましそうな顔をする狼とともに俯瞰してみれば、どうしてだろうか、愛おしいもののように見える。それは何より、下から彼を見上げる柴犬が感じていたことだった。

ピン、と一物が硬度を持つて立ち上がると、狼は交尾を始めようと柴犬の尻穴を探るように腰を動かす。その動きに合わせ、柴犬は少しお尻を上げて、狼の竿を迎え入れた。あまりにもずんなりあてがうことができ、狼が少し戸惑っていると、柴犬は目を少し丸く、大きくして、得意げな様子に見える。その見つめる瞳はどこか嬉しそうで楽しそうで、狼はすこし照れ臭くなってしまう。だが、ドンドンと身体の底から湧き出てくるこの熱は、そんなのでは止められやしない。ふう、と一息をついて、グツと四肢に力を入れた。

「やるぞ」

「いいよ」

狼は柴犬の承認を受け、ゆっくりと腰を押し込む。滑らか、とまではいかないが、徐々に、徐々に中へと迎え入れられ、コブが引っかかりとなりつつも、ずぶ、ずぶと、その手前の竿の部分には全て柴犬の中に収められた。ふうっ、と大きく漏れる吐息、そして荒れる呼吸。大きく息をするたびに、狼の胸部の柔らかい毛が柴犬の耳を掠めて、柴犬はくすぐったそうにする。

それに満足げな表情を浮かべるのも束の間、ハツとして慌てた様子で柴犬に問いかける。

「な、なあ、痛くないか？」

「うん、全然大丈夫そう。意外と余裕あるかも」

「そっか……。オレのはあんまり大きくないが、こんなすんなり受け入れるなんて、少し驚いた」

「うん、狼さんに会うまでに、広げてたから。絶対狼さんと交尾したいから、練習してきたんだよ」

淀みなくそう返答された瞬間、狼はカァツと顔を赤くさせる。柴犬は意外と正直者なようで、表情にも態度にもなかなか表れないが、言葉をよく聞くと狼へのイタズラ心の中に好意が見え隠れする。そんな柴犬に、狼の心は揺さぶりに揺さぶられていた。

「だから、生半可な交尾じゃだからね」

「……い、言われなくとも！」

恥じらいを隠すために、柴犬の発破にも強く反発するように答える。だが、心臓は跳ね上がるように高鳴っており、壊してしまいたいほどの情欲が襲い来る。その情欲に身を任せ、狼は柴犬を犯そうとした、はずなのだが。自身でも気づかぬうちに、柴犬を壊さぬよう、慎重に、慎重に腰を動かしていたのだ。それこそ、腫れ物に触れるかのような慎重さで。

狼は、孤独だった。来る日も来る日も、ただ一匹でこの森で

過ごしていた。家族も仲間も、謎の呪いにかけられ、一匹残らずこの森の屍にされてしまった。幸い狼には神か何かに不老不死の加護が与えられ、何も食べずとも、飲まずとも、眠らずとも。狼が死ぬことはなかった。だが、裏を返すとどんなに辛くとも死ぬなかったのだ。どんなに探せど、見つからぬ同胞。代わりに見つかるのは彼らの成れ果ての呪狼たち。

その現状に耐えかねて、狼はたまたま近くを通りかかった犬に、ただ対話することを求めた。それだけで、狼にとっては代え難い時間のように感じた。だが、狼の話し相手となった彼とはすぐに再会することになった——屍となった彼と。狼は泣いた。泣きながら、狼は彼を祓った。そしてその様子もまた、彼を探しにきた他の犬に見られてしまったのだ。化物。彼を返せ。その犬もまた、涙を流して嗚咽混じりにそう言う。狼はただ、その場から立ち去ることしかできなかった。

死にたかった。でも、死ぬなかった。苦しくて仕方なくて、何度も何度も死にたいと思った。だが、死ぬなかった。どんなに傷つこうと、どんなに腹が減っても、どんなに息をしなくとも、歳を重ねても、死ぬなかった。自身の身体に傷をつけた屍たちなら自身を殺せるのではないかと狼は考えたが、屍たちに出会った瞬間、意図せずとも奴らを祓うように身体が動いてしまい、それもまた失敗に終わった。何をしようと、死なせてはくれなかった。狼は思った。こんなのは、加護ではなく、呪いだ、と。なら、いつそのこと、皆と同じ呪いをかけられてい

たら、楽だったのに。そう思う度、自分に嫌気がさしていた。

それから、狼は使命に生きることにした。毎日森を走り回って、残っている屍を一匹一匹被って回った。例え、それが見知った顔であろうと。外の者はこの森から追い出した。これ以上屍を増やさぬように。何と言われようと、何が起ころうとそう生きた。そうするしか、選択肢がなかったから。無限とも思えるこの呪いを断つことに、希望を見出すほかなかった。だから、巻き込みたくはなかった。柴犬をまた殺してしまうんじゃないかと、怖がっていた。しかし、柴犬は何故か狼に好意を持ち、こうやって交尾まで求められてしまった。ならば、守る他ない。絶対に柴犬を傷つけるわけにはいかない。その考えが、狼を逡巡させていた。

「……っ!」

だが、そのように惑う狼の前脚に、柴犬は軽く噛み付く。抗議の目を向けるように下を向くと、柴犬もこちらを向いている。表情は、やはり変わったように見えないが、耳が少しへたっているのを見て、狼もしまったと思った。生半可な交尾では嫌だと言っていたのにオレは、と思いながら、狼は悪いと口にしようとする、また前脚に噛みつかれた。

「な、なんだよっ!」

「ね、狼さん。ぼくとの交尾、つままない?」

「つままないって、そういうわけじゃない。ただ、お前が……」

「ぼくが、じゃないよ。狼さんとぼくの交尾なんだよ。狼さん

も楽しんでくれないややだ」

柴犬の口調が僅かに強くなり、わがままを言うような口調になる。それ故に、柴犬が狼に何を求めているのか、より簡単に伝わる。それぐらいでない、怯えた子犬のように全てを怖がっている狼には、伝わらなかったのだ。

「狼さんは狼さんで良いんだからさ」

「オレは……オレでいいのか。残虐非道な狼で、いいのか」

「もちろん」

そんな大層なこと言って、オレのことを全部知っているわけじゃないだろう。そんな反論は頭によぎった。だが、柴犬はここまで行動で示してきた。いつ狼のことを知ったか分からぬが、狼のために身体を鍛え抜き、交尾の準備まで整えて、狼を求めた。それが、氷のように固まりきっていた狼の心を溶かしたのだ。オレは、オレでいい。オレが楽しんで、いいんだ。そう、狼に決意をさせた。

「……すまん」

「謝らなくて良いから、ほら」

呟くように謝る狼にそれだけ言って、ぼくを食べなくていいのか、というように訴えかけるような視線。可愛い丸い尻尾に、半目で生意気な表情をしているがその瞳はまん丸で、愛らしきを残している。そんな彼に、官能的に訴えられかけた狼は、仕方ないというかのように、ふっと笑う。こいつ、口うるさいしオレのことを全部分かってるみたいで本当にムカつく。けど、

絶対嫌いにはなれないだろう。そうして、狼はようやく本腰を入れる。

グググッとゆっくりながらも力強い押し込み、尻穴の中の感触を味わい抜く。竿が柔肉に少し食い込むと、それが優しく狼を絡めとる。

「狼さん、気持ちいい？」

「ああ、うん……すっげえ、気持ちいい……」

問いかける柴犬の声は、もうさっきのように詰めるような声ではない。そして、狼の声も、艶やかになっていく。ようやく自らに課していた箍を外し、自分も気持ちよくなれるように腰を動かしていく。

「つつ……!」

「だ、大丈夫か?」

しかし、柴犬は苦痛に声をあげる。どうしても、無茶があったのだ。身体で柴犬が覆い隠せるほど、狼とは体格差があるのだ。多少個体として小さめでも、その身体にかかる重量は桁違いだ。

「ああは、流石に奥まで入ると少し痛いな……。でも、それ以上には気持ちいいんだ、狼さん。もつとしてよ」

狼に対しては笑って甘えるようにそう言うが、柴犬にはつんざかれるような痛みが走っており、少し口元を苦しそうにしていた。だが、それを隠し通すように柴犬は振る舞う。本当に、痛みが我慢できてしまうほど、気持ちいいのだ。何より、あの

日からずつとこの時を待ち焦がれていた。だから柴犬は、どんな痛みがあろうと、嬉しきで笑っていられた。

「……堪えてくれよ」

その柴犬の気持ちを知ってか知らずか、狼はそのままグイグイと腰を動かす。ここで自分を欲してくれた柴犬に応えないなど、オスとしての矜持が許さない。恐れを噛み殺し、狼はもう一度奥へ突き入れる。

「くうっ……ああ、くそっ」

快感が本能を呼び覚まし、本能がストロークをだんだんと早くさせ、また狼に生じる快感は強くなっていく。どんどんどんな腰が止まらなくなり、交尾らしい交尾へとたらしめる。

「お前の中、超気持ちいい……! もつと、お前を、感じさせてくれ……!」

「……! いいよ、狼さん。もつとぼくを、感じて……!」

必死で腰を動かす狼は、そう言って柴犬を切望する。ずっと寂しかった狼。誰かの温もりを忘れていた狼は、渴望するように柴犬を求める。それに、柴犬は満更でもない表情で微笑む。

そうやって、求めてくれたのが嬉しかったのか、柴犬のモノも少しずつ顔を出し始めていた。

「はあ、はあ、はあ……!」

「ん、んあ、んう……」

狼の吐息と、テンポ良く毛皮が擦れ合う音。まだ少し快楽の合間に生じる痛みが脂汗を滲ませながらも、柴犬もまた息と共



に少し熱っぽい声が漏れる。狼が深くへと突き刺すと、脳に伝わる痛みの信号すら掻き消しかねないドーパミンが湧き出てくる。最高に、幸福な時間。二匹はそう、確信する。

「出る、出るぞっ……！」

「あつ、ぼく、もっ……！」

しかし、快樂を得れば得るほど無常にも終わりが近づく。狼の一物は放出準備を始め、尿道へと精を送り込み始める。それは柴犬も同じで、前立腺が収縮しつつ、一物がふるふると震えていた。交尾というのは、果てが来たなら終える他ない。繋がりには飢えていた狼には、この交尾を終えることに交尾が終わってしまうとしても、もう今の狼にはさほど問題ではない。

「グウッ!! グッ、アオウッ!!」

「ふうっ、あっ! はあんっ!」

狼がコブまで柴犬の中に入れたとき、彼らの果てが到来する。狼が柴犬の方に向き直ると、彼はニツと得意げにする。それに、狼は満足そうに笑うのであった。

……ここは。柴犬は思考を巡らせようとしたが、どうも身体に鈍い痛みを感じられる。あれ、ぼく、死んだのかな。そう思えるほど、身体が一寸たりとも動かず、感触も全く感じない。

「……まだ、息はあるな」

誰の、声だろう。声質は柴犬とそう変わらぬが、どこか疲れ

たような、倦怠感を感じるような声色であった。だけど、そんな状態であろうが、柴犬の傷口を押さえながらも必死に助けてくれようとしてくれた。

「もう少し、辛抱してくれ。絶対オレが助けてやるからな」

励ましのようというその声の主を見ようと、僅かに開いた瞼から見えたのは、自分よりもはるかに大きい、翠玉色の瞳の白い狼だった。

パチリ、と柴犬が目を開くと、そこはさっきと同じ光景。

ただし、自分は傷など一つもなく、身体も元気に動く。柴犬がいつも見る夢だった。確か、『呪狼』に襲われて気絶した時に、助けてくれた狼がいたのだ。

「大丈夫か、お前」

それが、今も心配そうに声をかけてくる狼だった。柴犬が助けられたときと、全く変わらぬ姿をしている。猛々しく、機能美と言えるような身体つきの中に、輝く宝石のような優しい瞳。そんな狼に救われて、そして今とうとう彼の隣にすることができて幸せだった。

「うん、ちよつと疲れただけだよ」

「本当だろうな？」

うん、と答える柴犬の声はどこからどう聞いても偽りに感じない。それに安堵したのか、ようやく狼は隣に座り、柴犬の前にどきりと何かを置く。

「ほい」

「何これ」

『宝草』って言ったら伝わるか？」

それに柴犬はピコンと耳を立てる。その植物はとても希少で、飢えた犬たちには宝となることから、『宝草』と呼ばれている。なんだかんだ、長い時間飲み食いせずに狼と時間を過ごしていたから、柴犬は空腹になっており、それを喜んで口にする。

「……まずっ」

だが、無味というか、食べられなくはないという味わいに、柴犬は少し顔を顰めた。でもまあ、空腹とのどの渴きを紛らわすことはできる。何より、そんな柴犬の様子を見て、悪いな、こういうのしかないんだ、と決まりが悪そうに言われると、さすがの柴犬でもこれ以上詰る気にはなれなかった。

「しかし、良かったのかよ。オスの、しかも狼なんて交尾して」

「したいってぼくが言ったのに、良かったに決まってるじゃん。それとも、気持ちよくなかった？ あんなにぼくの中にダラダラ流し込んだのにねえ、優しい犬さん」

「あつ、あのなあ……」

犬じゃねえ、と突っ込めないほどに、狼は酷く赤面する。一匹でいる時間が長かったせいかな、こう言ったことにどうも弱いようで。知ってか知らずか、柴犬は得意げに笑いながら追撃を仕掛ける。

「もう、体を交わしておきながら娶らないなんて、そんなのぼく認めないよ」

鼻先をコツリ、とぶつけながらそういうと、また一層狼の顔が赤くなる。毛皮の上からでも顔に血が昇っているのが見えるんじゃないかと思うほど、分かりやすく照れる。それに柴犬が満足して、もう一眠りしようとしたときだった。

「オレ、さ」

しどろもどろになりながらも、顔を真っ赤にしながらも、狼はもう柴犬から目を離さない。綺麗な宝石のような緑色の瞳が、柴犬のことをじっと見つめていた。

「お前のこと、精一杯幸せにしてやる。お前が死ぬまで、絶対に幸せにし続ける。それが……オレのやりたいことだから」

そう、力一杯宣言する。失うことを恐れて、得ることすら辞めてしまった狼が、ようやく手にしようとした幸せ。失うことを恐れず、絶対に自分を取り残されとしても、柴犬が自分との生涯を全うできるよう、狼は決意する。その決意が溢れた言葉に、柴犬も思わずたじろいだ。

「……うん」

柴犬は彼の身体に寄りかかる。少し固い毛皮は気持ちがいいものではない。それでも柴犬は、彼の照れ臭そうな、怯えがなくなった顔を見て、満足げに微笑んでいた。







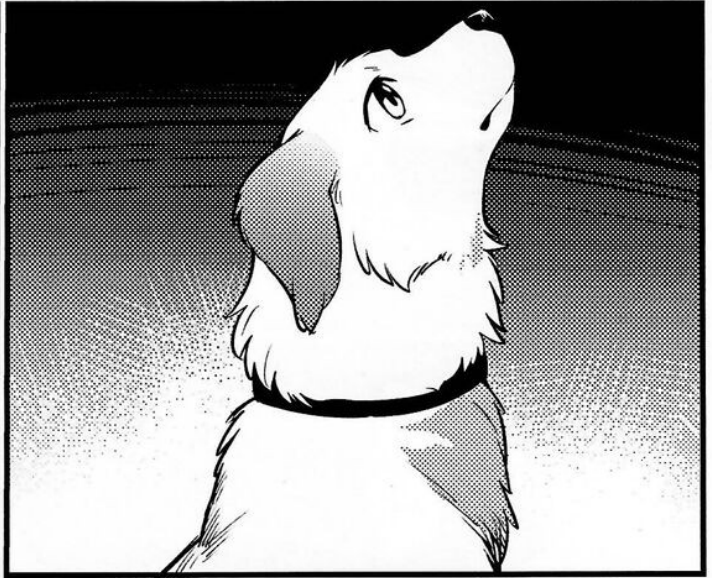
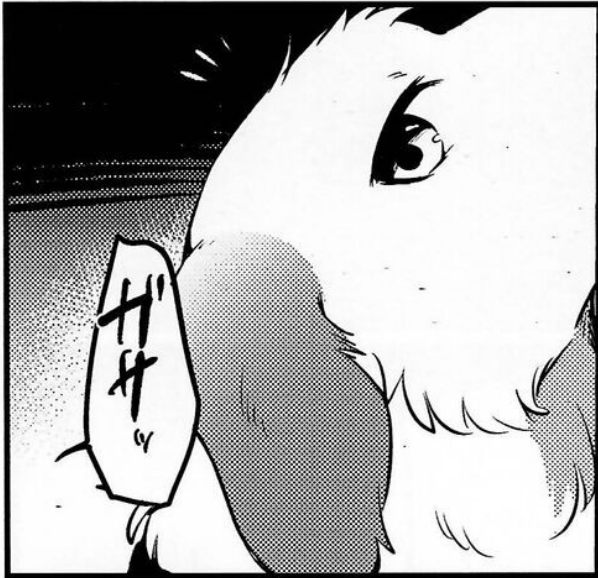
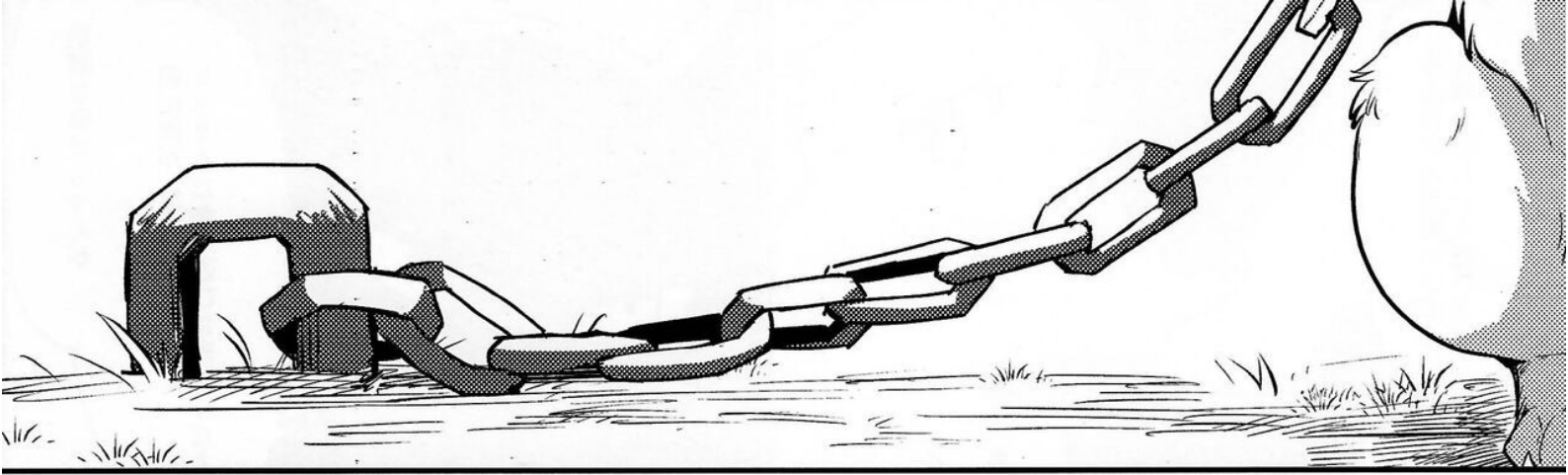
野生のオオカミ

×

ガミンちゅ中型犬

@direwolf_reiya





従順な獵犬ちゃんが

鎖に繋がれて自由もなく
ヒマそうだから遊びに来てんだよ

なんだかんだ言いながら
お前も嬉しいんだろ？

……っ

ふん

それともなんだ？
今日は遊ばないのか？

……っ

す……

好きにしてくれ

ぽちゅん

ぽちゅん

あ

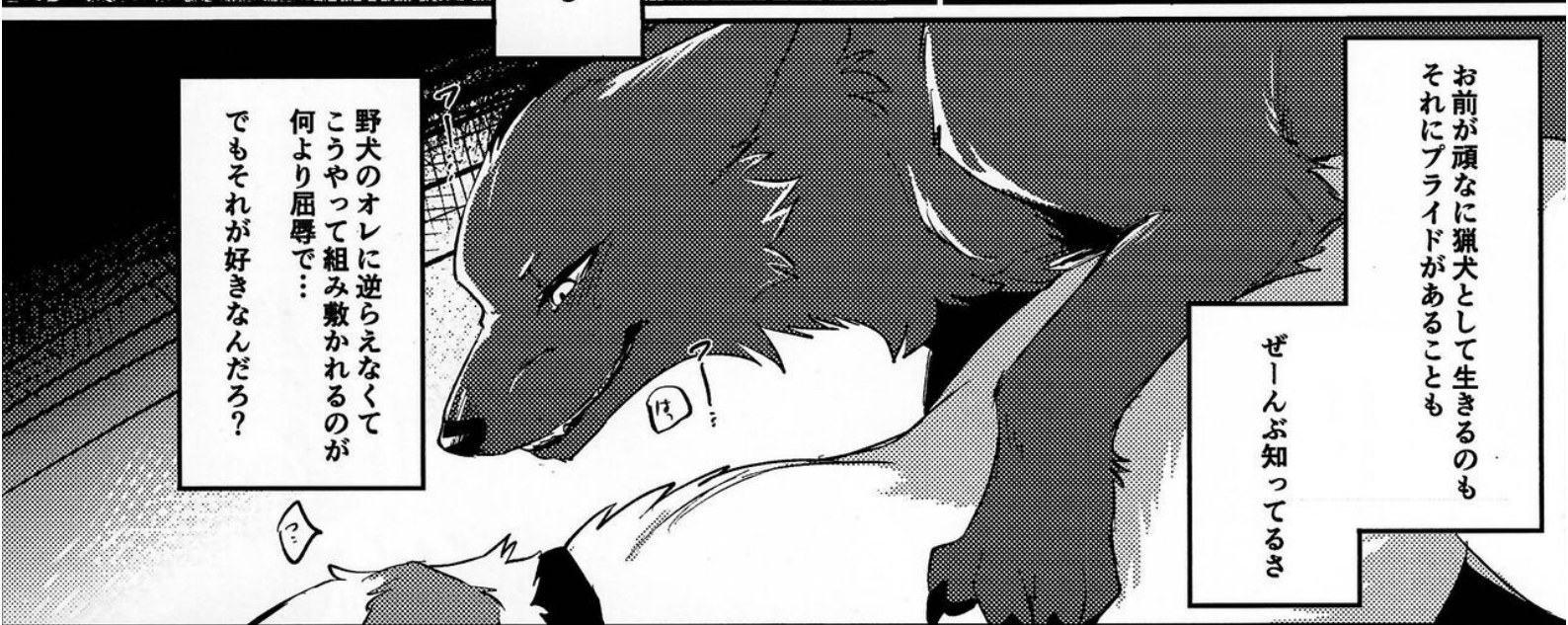
は

は

は



…知ってる



お前が頑なに獵犬として生きるのも
それにプライドがあることも

ぜーんぶ知ってるさ

野犬のオレに逆らえなくて
こうやって組み敷かれるのが
何より屈辱で…
でもそれが好きなんだろ？



この時だけお前のプライドは
ぶち折られてて
普段のお前でいなくていい

安心してんだろ
そうなんだろ



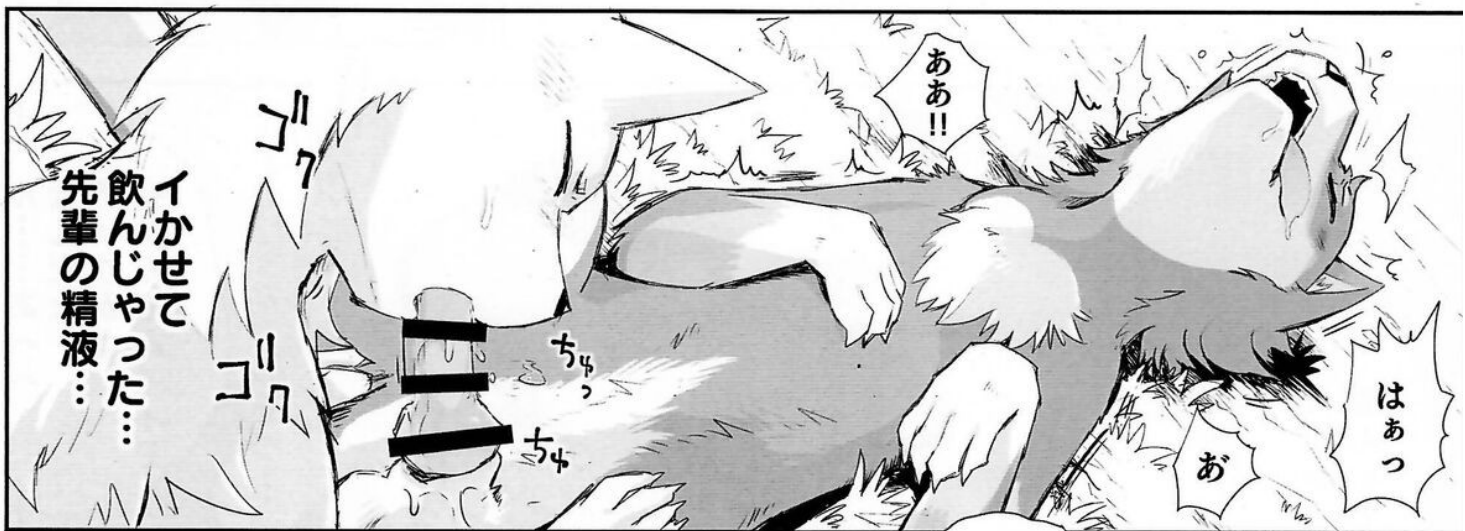
すぐに
わからせてやるからな











うお...お...
気持ちいい...

あつ
射^で精^る

くううう!!

ちゅぽん

ルル

ちゅ

ちゅ

ちゅ

て

ぬる

て

ああ!!

はあつ

あ

イかせて
飲んじやった...
先輩の精液...

ゴク

ゴク

ちゅ

ちゅ

っあー...

上手^{ウマ}かった...
オマエこれが
したかったのか?

まあ...全然
イイけど...

いやイイとか
そういう単純な
事じゃなくて!!

フー

フー

...やっぱりこのひと
なんにもわかってないな...くそお







あつ…
いきそ!!

がああつ!!

あつ

ああああ!!



ホント…

なんか…
超嬉しい

この瞬間…

よかったな!完。



やべえ…
やらかした…

だから
大丈夫
だったの



嫌われ…

お話しいただき
ありがとうございます！

いつもはメスを描いている私ですが、実はオスもBしも
犬チンも大好きです！

今回も楽しく描かせて頂きました！

素敵な合同誌を作ってくださったほうるさん、
本当にありがとうございます！！

MOMOU♡

X @MOMOU_illust



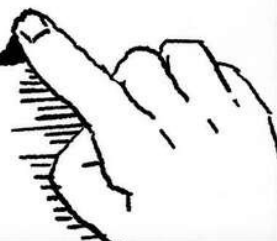
あっちもくんくんこっちもくんくん。
なかよくくんくんしあってほしい。

マノレオ @manoreo



大好きなお友達犬がお家に来て
久々に会えた喜びを分かち合って
一緒に楽しく遊んだりお水飲んだりして
自然にセックスが始まれば
いいんじゃないかなと思いました

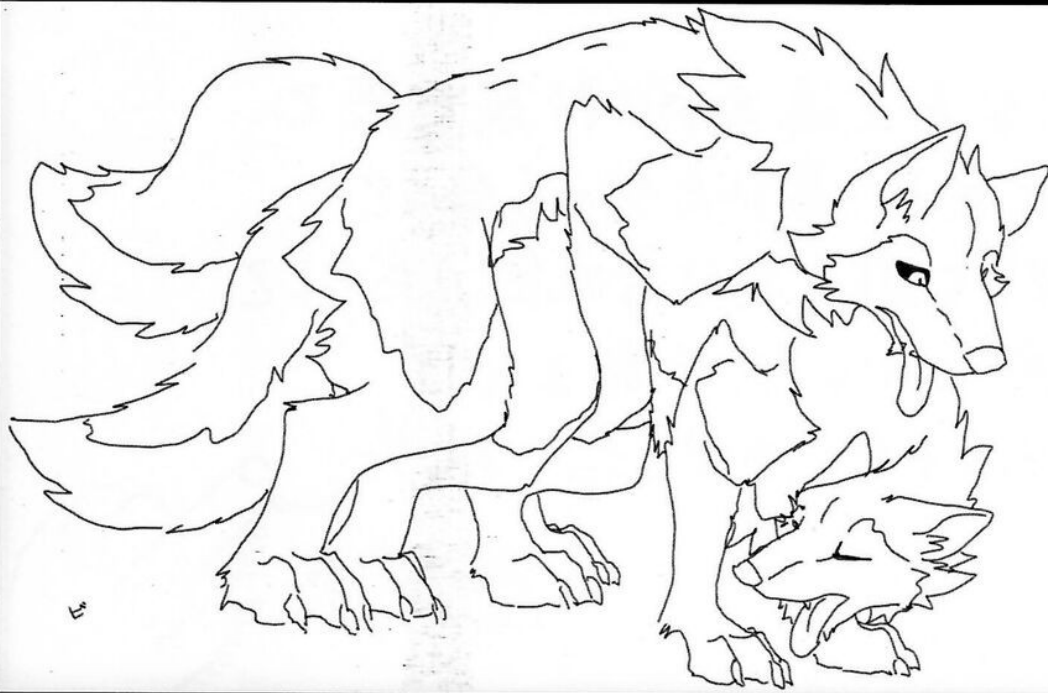
潮路商事
X: @Hot_Dog_Wolf



名月や
我を見下ろし
頬照らす
恋焦がれるは
おおかみちんぼ

お誘いありがとうございました

烙雷 @Laquray88



悔しいなあ

マウント
できるように
なっても

またすぐ
目の前の背中から
降りるんだ

Dearest 2 千行
おめでとうございます!!



今回はお誘いいただき、ありがとうございました!!
気合入れて10p超えの漫画を描いていたのですが、
間に合わず今回は1pイラストを寄稿させていただきました。
体格差はいいぞ.....
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

@direwolf-reiya 零夜アルフ





四つ足と真剣に向き合ってみた

自分が知ったつもりでいて
知らなかった事だらけで
ものすごい勉強になりました。
ひよんなことから主催様に
絡ませていただくようになり
あれやあれやと今に至ります
超ありがとうございます。

X(Twitter) @yamatokuroko965

YAMATO KUROKO 大和黑子



発行誌名:Dearest 2
発行年月日:2023年9月17日
サークル名:Wolfonia
代表者:一ツ田 はうる
連絡先:wolfonia.official@gmail.com
印刷会社:クイックワークス 様

ーツ田はうる

Momou

マノレオ

潮路

烙雷

B_Curd

零夜アルフ

水賀つくね

大和黑子